学位論文要旨

能力ベースの幼児の見取りに関する基礎的研究

― 幼小接続期の 5 歳児に着目して ―

広島大学大学院教育学研究科
博士課程後期　学習開発専攻

D156622　　池田　明子

第1章　問題の背景と目的

1. 重要視される幼児教育と能力の育成

少子高齢化社会，女性の労働市場への参加の増大，子どもの貧困と教育上の不利益の問題等，近年の社会的状況から，OECD 諸国では幼児教育への関心が高まっている。(OECD, 2011)。その背景には，経済学者による縦断研究を通して，幼児期に質のよい保育が保障されることで，学業や働きぶりや社会的行動により良好な結果をもたらすことが明らかになってきたということがある(Heckman, 2015)。このような世界的な幼児教育重要視の動向，また日本における様々な社会問題への対応の要請の中で，幼稚園教育要領等は 2018 年に改訂され，社会的状況に対応する資質・能力を幼児期から育成することが一層求められるようになった(無藤，2017)。またこの資質・能力は，幼児教育から高等学校までの見通しをもって，系統的に育成することが求められ，それぞれの学校種の学びの連続性が確保されることが重要視されるようになってきている(中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会，2015)。

2. 能力の捉え方

幼児期からの能力の育成は重要視されるようになってきているが，「能力」に関係する用語としては，「認知能力」「非認知能力」「資質・能力」など様々な言葉が使われており，何を「能力」と捉えているのかは十分整理されていない。そこで，能力に関係するアビリティ(ability)・スキル(skill)・コンピテンス(competence)の捉え方を，遠藤(2015)，依田(1983)，田中(2015)などを基に整理した結果，アビリティ・スキル・コンピテンスは内容的に関連し合い，相互に影響し合っており，不可分であるということが分かった。したがって，本研究では幼児の能力を，言語能力・運動能力などの認知能力と，有能感・自制心・共感性などの社会情緒的コンピテンスの両方を含んだものとして捉えることとする。

3. 幼児の能力の見取り

例えば西坂・岩立・松井(2017)によれば，幼児教育では，これまでも非認知能力(本研究で示す社会情緒的コンピテンスに相当する)を含む能力の育成はされてきていたが，そのことを保育者自身があまり意識しておらず，能力全体が捉えきれていないという状況にある。幼児教育では幼児理解が重要であるが，この幼児理解は，平野(1998)が「見取り」としている「教師が一人一人の子どもに寄り添って言葉や行動に現れた事実を解釈し，その子どもの内面を

推測すること(p.103)」でもある。能力が意識されてこなかった理由の一つには，このような見取りが能力に対しては意識されてこなかったということもあるだろう。幼児の思いや考え，よさや可能性，さらにそれらと関連する様々な能力の状態を見取り，理解する実践のためには，幼児のこれらの状態を見取る方法についても同時に支援していく必要があるだろう。

また，「自立する姿」を支える能力の捉え方が，幼稚園教師や小学校教師では違うという山田・大伴(2010)の指摘があることを踏まえれば，まず，見取りの対象となる能力を整理し，幼稚園教師や小学校教師を考慮して，幼小接続期に必要となる能力を明らかにしておく必要もあるだろう。

4．研究の目的

本研究では，幼児の能力の具体的内容を明確にし，能力に着目した保育実践の有効性を検討するとともに，能力の見取りを支援する方策を提案することを目的とする。能力に着目した保育実践は，能力観や教材観の異なる幼小をつなぐ時期である幼小接続期の 5 歳児に対して有用であるという考えから，本研究では，特に幼小接続期にあたる 5 歳児（以下「幼児」と記述する）の能力に着目する。

第2章　幼児の能力と保育者の支援

1.観察から捉えられる幼児の能力（研究 1）

1.1.目的

幼児の能力を具体的に捉えるために，まず実際の保育場面で保育者が一般的に捉えている「力」という観点から整理し，その力の背後にある能力について考察することを目的とする。

1.2.方法

国立大学附属 A 幼稚園 5 歳児 2 クラス（2015 年 9 月，10 月，2016 年 6 月），公立 B 幼稚園 5 歳児 2 クラス（2016 年 11 月）の観察を実施した。いずれも，好きな遊びを見つけて遊ぶ時間やクラス全体での設定保育の時間など多様な場面のビデオ録画を通した観察を行った。

1.3.結果と考察

幼稚園 5 歳児の観察を通して，保育者が幼児の能力の育成を意識していると思われる場

面や保育実践経験のある筆者が幼児の能力が育成されていると捉えられる場面について整理した結果，10 事例が抽出された。1 例をあげると，次のとおりである。

表 1　事例 1（2015 年 10 月 9 日）

5 歳児 2 クラス合同で玉入れをしている。クラス対抗で玉入れの勝負をして，a 組が勝ち，b 組が負ける。みんなが座った所で，保育者は「玉の数は a 組さんが勝ったけど，（地面の上に書かれている）輪の中に入らないというお約束は b 組さんが上手に守れたよね」と声をかける。保育者の言葉を聞いた a 組の子どもたちは急いで輪の外に出る。それを見た保育者は再度「そうだね。自分で，“あれ？線の中に入っていなかったかなあ”と胸に手をあてて考えてみてね」と声をかける。

表 1 の事例 1 から分かるように，玉入れをクラス対抗で行う際に，約束を守るという点を認めることで，全員が達成感や有能感を味わえるようにかかわっている。また，笛がなったら輪の中に入らないという約束を守るように支援することで，ルールを自分で理解し，守ろうとする力や自分の気持ちを調整する力を幼児に育もうとしていることがうかがえる。さらに，自分自身で考えるよう声をかけることで，自分のことを振り返るメタ認知の基礎となる力を育もうとしていることがうかがえる。

このように 10 事例について分析を行った結果，保育者が一般的に捉えている「力」という観点からその背後にある能力について考察したところ，幼児が発揮しようとしている力の背後には，認知能力，社会情緒的コンピテンスとしての能力，様々な能力が関連し合っている能力，今後発揮されていくと捉えられる能力など多様な能力の捉え方があることが分かった。

2. 幼小接続期における能力の捉え方（研究 2）

2.1.目的

小学校教師が保育（幼小接続期5歳児）に参加し，幼稚園教師と協議することを通して，教材や環境設定の捉え方や意味づけの背景に見られる，幼児の能力の捉え方の相違を検討することを通して，育成すべき幼児の能力について考察することを目的とする。

2.2.方法

2014 年 10 月に小学校教師が，TTで5歳児クラスの保育に参加した。好きな遊びのひとときに音楽科専科教師による音遊びコーナー・図画工作科教師による粘土遊びコーナー，生活科

専科教師による転がし遊びコーナーを設け，各自授業の空き時間を利用して参加した。その後，TTとして体験したことによる気付きをもとに，約 90 分間協議した。協議は事前に承諾を得た上で録音した。

2.3.結果と考察

小学校教師によるTTとしての保育参加をふまえた協議を通して出た話題としては，教材の捉え方，教材を活かす環境構成，教材を通して設定するねらいの 3 点に分類された。例えば，土粘土の使い方については表 2 のとおりである。

表２ 土粘土の使い方

小学校T	土粘土を外に環境構成することでいろいろな可能性をもっと広げてほしい。室内だったらやはり汚れてはいけないと思ってしまうのではないか。土粘土は自然のものだから放ったらかしにしてもまた泥として元に還る。もっといろいろな外の環境に粘土で働きかけてもよかったかな？
小学校T	もっと投げてもよかった。松の木に投げてみたら落ちた。もっと平らなものだったらしっかり投げてベチャっとつくのも面白い。
幼稚園T	土粘土を通して外のいろいろな環境に働きかけるというよりは，外にある環境を活かす。例えば外にある雨上がりのドロドロを楽しんだり，砂場の砂にふれあったりしている。
小学校T	土粘土は土と混ざっても自然のものだから構わないけれど，紙粘土や油粘土は土と混ざると大変。
幼稚園T	油粘土も紙粘土も土粘土も粘土板の上で扱うものというように扱い方は同じようにとらえている。

表 2 からわかるように，小学校教師は，幼児にも土粘土を使って園庭や自然物とかかわることを期待し，周囲のものと関連づけて考える探究心や思考力を求めていると捉えられる。しかし，この探究心や思考力は小学校の図画工作科で土粘土を扱う時の教材観に基づいているとも捉えられる。そのような意味では児童に求めている能力と幼児の姿を見て幼児でも育成することが可能な能力とが混在していることが推測される。

研究の目的としては，幼稚園・小学校教師による幼児の能力の捉え方の相違を通して育成すべき幼児の能力について考察することであったが，幼稚園教師は幼児の能力について，小学校教師は保育でかかわった幼児の姿に基づいて幼児の能力と児童の能力を混在して捉えている，もしくは幼児の姿に基づいて児童の能力について捉えていることが明らかになった。1 点目として，幼稚園・小学校教師で求める能力の共通点について，例えば転がし遊びの際に，幼稚園・小学校教師とも幼児・児童に対して感覚器官を十分に生かしながらの思考力の育成を重視しているということが分かった。2 点目として，幼稚園・小学校教師で求める能力の共通

点と相違点について，例えば土粘土を通して感覚を育成することは共通しているが，児童に対しては，感覚を通しながらも素材の性質に気づく力や知識の習得を重視しており，幼児に対しては，対象に直接ふれる中での感覚の育成を重視しているということが分かった。しかし本節では，限定された教材や環境構成に関する考察にとどまっているので，幼児の生活全体を通して幼児の能力について捉えることが必要である。

3.幼児の能力と保育者の支援（研究 3）

3.1.目的

幼児に発揮される力を構成している能力を明らかにし，幼児の能力の具体的内容を能力の見取りとして，能力を育成する保育者の支援を整理することを目的とする。

3.2.方法

幼児に発揮される力の背後にある能力について，文献研究を通して明らかにし，それぞれの能力の定義をもとに類似した能力を整理する。また，著者の保育実践経験をもとに能力ごとの幼児の姿や保育者の支援について整理する。

3.3.結果と考察

前節で明らかにした幼稚園での観察による 10 の事例から幼児に発揮されている力としては 20 の力が導き出された。無藤・岡本・大坪（2015），秋山・成田・山本（2006），矢野・落合（1991），御領・菊池・江草（1993），篠原（1998），無藤・子安（2011）等をもとに，幼児に発揮されている力を構成している能力を導き出した結果，24 の能力が導き出された。更に類似した能力を整理した結果，育成すべき幼児の能力として 10 の能力を導き出した。10 の能力及びその具体的内容が表 3 である。

表 3　幼児の能力と具体的内容

能力	具体的内容
自発性	・自分が興味・関心をもったことに自分からかかわろうとする。
有能感・有用感	・自分なりの課題に取り組んで，できたことや役に立てたことを喜ぶ。
道徳性・共感性	・生活や遊びのルールを理解し，自分で守ろうとする。 ・相手（生き物を含む）の気持ちや状況を感じて思いやる。
メタ認知	・周囲の状況や身近な出来事の中で，自分はどうしたらいいのかが分かる。
自己制御力	・生活の流れを理解し，円滑に集団生活を過ごすことができるように行動しようとする。 ・自分なりの課題意識をもち，最後まで粘り強く取り組む。
思考力	・物事の比較・分類・因果関係につながる事象に面白さや不思議さを感じたり気づいたりして，工夫して取り組む。
感覚・知覚	・自分の興味・関心があるものの大きさ・量・色・音・感触・においなどの特徴や変化を様々な感覚を通してとらえる。
運動技能	・身体の動きを調整したり，コツをつかんだりして，多様に（協応して）身体を動かす。
言語能力	・相手に自分の思いを分かりやすく言葉で伝える。 ・言葉の意味や相手の思いを理解しながら，相手の話を聴く。
表現力	・感じたことやイメージしたことを，言葉・身体・音楽・造形などを媒介として工夫して表現する。

表 3 をもとに，実際の保育場面で能力が発揮される幼児の姿と保育者の支援を示したものが表 4 である。ここでは 10 の能力の一例として「有能感・有用感」をあげる。

表4　10 の能力に基づく幼児の姿と保育者の支援

能力	幼児の姿	保育者の支援
有能感・有用感 自分なりの課題に取り組んで，できたことや役に立てたことを喜ぶ。	①子どもがやりたいと思っていることに，取り組めない場合 ②子どもがやりたいと思って取り組むが途中であきらめたり投げ出したりしている場合 ③子どもが自信をもってやりたいことに十分取り組んだり，役に立てたことを喜んだりしている場合	①自分なりの課題に向けた取り組み方が分かるよう，子どもがやりたいことに取り組めないように見える時の思いを理解しながら，子どもなりの課題を受け止めて共に考えたり，寄り添って一緒にしたりする。 ②自分なりの課題にあきらめずにかかわることができるよう，子どもの揺らぐ思いを受け止めながら，寄り添って励ましたり，自分でできる喜びに共感したりする。 ③達成感や満足感を味わうことができるよう，子どもが本当に自信をもってやりたいことに取り組んだり，役に立てたことを喜んでいるかを見取りながら，自分自身でかかわっていることを認めたり，友達とも喜び合えるよう投げかけたりする。

第 2 章では，幼児の能力として 10 の能力を導き出し，その能力を育成する保育者の支援を幼児の具体的な姿ごとに整理することができた。しかし， 実際に幼児の能力を見取り，能力の育成に向けた保育実践の有効性について明らかにすることが必要である。

第 3 章　幼児の能力と保育者の支援に基づいた保育実践の有効性（研究 4）

1. 目的

幼児の能力の具体的内容を見取りとした，保育実践の有効性について検討することを目的とする。

2. 方法

公立 H 幼稚園年長児 1 クラスを対象とし，1 グループ 5～6 人の 5 グループを構成した。保育実践の有効性を検討する観察日として第 1 回を 2017 年 5 月，第 2 回を 2017 年 6 月に設定し，普段幼稚園では使用しない型の積み木を用いて遊ぶ場面を各グループごとにビデオカメラで観察した。また，期間中の保育において 10 の能力に留意した保育を実施するように依頼した。なお，実際にどのような保育実践が行われているかということについて著者が観察した。観察日は 2017 年 5 月と 6 月の 2 回であり，移動式ビデオカメラを持って，ランダムに多様な場面を撮影した。

3.結果と考察

期間中の観察

5 月 30 日に観察した中で，10 の能力に着目していることが顕著に表れている例を示す。

表 5 事例 2（2017 年 5 月 30 日）

幼児たちと保育者が『けいどろ』をして遊んでいる。『警察』役になる人，『泥棒』役になる人，『見張り役』になる人という役割分担を適宜幼児たち同士でしている。保育者は幼児たちと一緒に走った後に，『見張り役』の幼児たちのそばに行く。幼児たちが適宜保育者に話しかけると，保育者は一人一人の方を見ながら楽しそうに対話している。そして，途中で役割を交替している A 児に，『A くん，警察？』とみんなに聞こえるような声で確認をとり，幼児たちみんなにそれぞれの役割が共有できるようにしている。しばらく走って疲れたような表情をしている B 児に，『B くん，見張り役する？』と固定遊具に座る見張り役を勧める。B 児はうなずきながら固定遊具に見張り役として座る。保育者は再び幼児たちと楽しそうに走っていく。

表 5 の事例 2 に見られるように，保育者は幼児たちの役割をみんなで共有できるように確認をとることで，ルールを守るという道徳性や自己制御力を育めるようにかかわっている。また，走り疲れた幼児に寄り添うことで，共感性を育むかかわりを行っている。このように，保育者は著者が説明した能力に着目した保育実践を行っているということが分かった。

能力に着目した保育の効果を検証するための観察

能力を意識した保育実践の有効性を明らかにするために，第 1 回・第 2 回の各能力の出現した事例数に偏りがあるかどうかという頻度について示したものが，表 6 である。

表 6　幼児の能力の変容

	第1回　（１回目）			第2回　（２回目）		
	前半a	後半b	全体	前半c	後半d	全体
自発性	0	0	0	0	0	0
有能性	6	4	10	12	5	17
道徳性①	0	1	1	5	8	13
道徳性②	1	3	4	6	7	13
メタ認知	5	0	5	5	2	7
自己制御力	8	14	22	22	18	40
思考力	1	3	4	7	2	9
感覚知覚	9	7	16	6	8	14
運動技能	0	3	3	11	10	21
言語能力①	9	14	23	25	15	40
言語能力②	4	1	5	1	1	2
表現力	28	15	43	21	13	34

表 6 について χ^2 検定を行った結果，第 1 回目と第 2 回目の比較を見ると，道徳性①（$\chi^2(1)=10.3$，$p<.05$），道徳性②（$\chi^2(1)=4.8$，$p<.05$），自己制御力（$\chi^2(1)=5.2$，$p<.05$），運動技能（$\chi^2(1)=13.5$ $p<.05$），言語能力①（$\chi^2(1)=4.6$, $p<.05$）で，第 2 回の方が第 1 回よりも有意に多くなっていた。有意差が見られた能力，例えば道徳性②については，自分の状況を踏まえながら，相手の状況を思いやろうとする内容が増えていることが分かった。このことは，期間中の観察にも見られたように，保育者が上記の能力に着目して保育実践を行ったことが有効であったということが考えられる。

第 4 章　遊びの見取りチャート作成とチャート活用が保育に与える影響

1.遊びの見取りチャートの作成（研究 5）

1.1. 目的

幼児の能力の見取りを支援する方策として，能力を発揮する場面である遊びを通して能力

を見取ることができるよう，遊びの見取りチャートを提案することを目的とする。

1.2.遊びの見取りチャート作成の手順

遊びの見取りチャート作成に当たっては，幼児の遊びを能力の観点で観察した結果や著者の保育実践経験に基づいて整理した。具体的にはチャートの流れについて，能力や能力を見取る観点の精選について， 実際の保育に反映しやすいチャートの活用の仕方についてという 3 点について工夫して作成した。

1.3.遊びの見取りチャート

前節の手順で作成した遊びの見取りチャートを図 1 に示す。また，実際には保育者が活用しやすいように，記入例や説明書も併せて作成した。

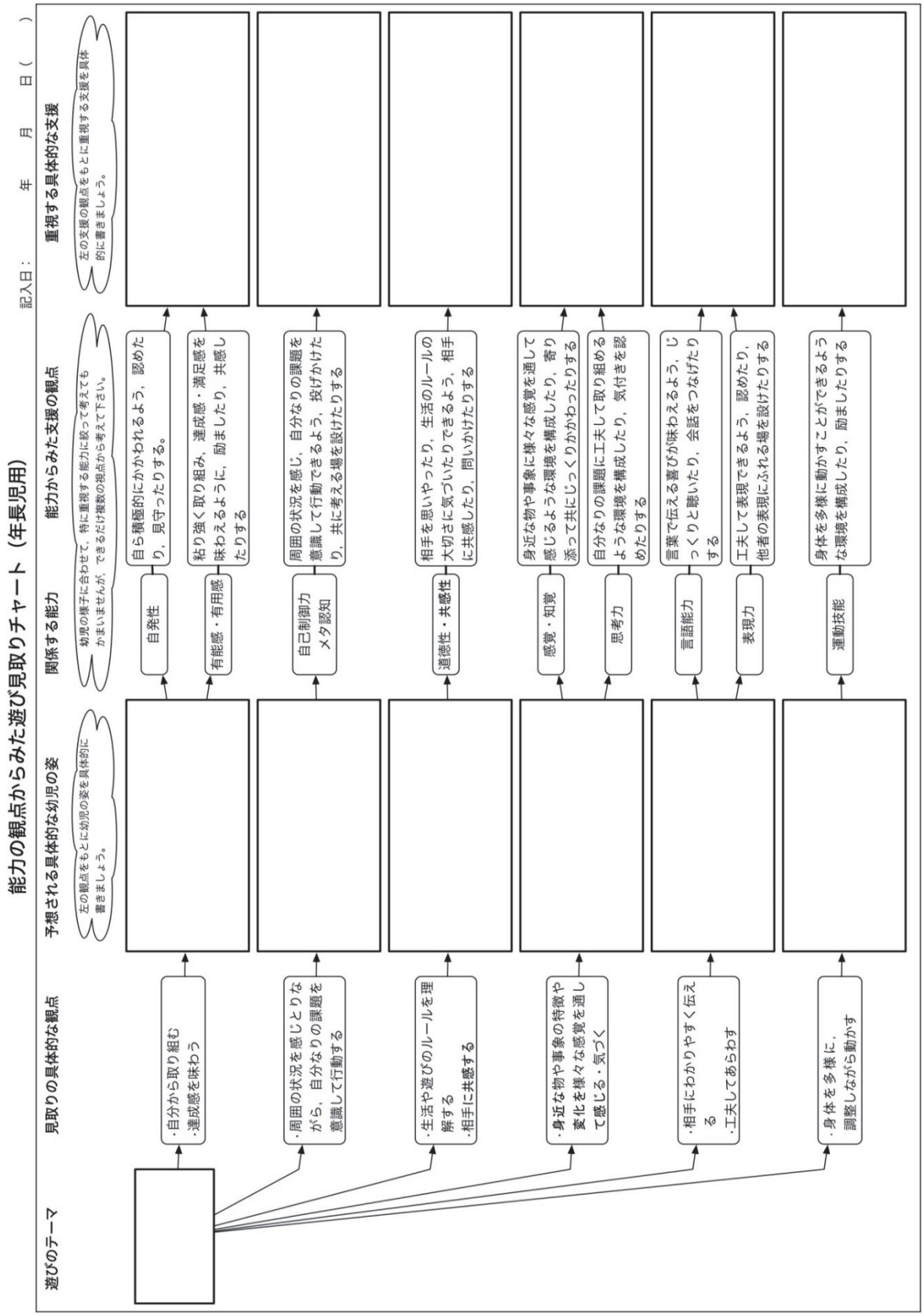

図１　能力の観点から見た遊びの見取りチャート（年長児用）

2.遊びの見取りチャート活用が保育に与える影響（研究 6）

2.1.目的

遊びの見取りチャートを保育者が実際に活用することで，能力の見取りにどのような影響を及ぼすかということについて明らかにすることを目的とする。

2.2.方法

公立 H 幼稚園の5歳児担任 2 名を対象とし，2019 年 2 月から 3 月の間で，各保育者に一つの遊びを選出したうえで，遊びの見取りチャートに記入してもらうように依頼した。3 月末に，年長児担任 2 名を対象にインタビュー調査を約 60 分間実施した。

2.3.結果と考察

遊びの見取りチャートを保育者に実際に活用してもらい，チャートの効果に関するインタビューを行った結果，次の 5 点が明らかになった。1 点目として，保育者が幼児の能力を見取りやすいように，6 項目に精選したことは妥当であった。2 点目として，遊びの見取りチャートと具体的内容を記述した説明書の 2 種類があることで，保育者は能力の概念が具体的な幼児の姿として理解しやすい。3 点目として，チャートの形式が遊びの中で幼児の能力をどのように見取り，支援したらいいかまでの一連の流れが矢印で示されているので分かりやすい。4 点目として，「予想される具体的な幼児の姿」や「見取りの具体的な観点」は，幼児が各観点についてできる・できないと捉えるのではなく，どのような状況なのかを見取る観点であるということを保育者が理解できるような工夫について検討することが必要である。5 点目として，チャートを活用することで，能力の見取りや育成の仕方について意識することができたり，保育カンファレンスにおいても活用できたりする。

第 5 章　総合的考察

本研究の意義としては，次の 3 点があげられる。1 点目として，育成すべき幼児の能力として「自発性」「有能感・有用感」「自己制御力」「メタ認知」「道徳性・共感性」「感覚・知覚」「思考力」「言語能力」「表現力」「運動技能」の 10 の能力を導き出し，その具体的内容を明らかにすることができた。このことにより，保育実践の場においてこれまで抽象的だった能力の捉え方が具体的になり，保育者は幼児の姿を能力の視点で明確に捉えることができると考えられる。2 点目として，は幼児の能力を見取り，育成する保育実践の有効性について実際に検討

し，観察園の幼児については「道徳性」「自己制御力」「運動技能」「言語能力」が，有意に変容していることが分かった。このことにより，幼児の能力を見取りの視点とすることが，幼児期に必要な能力を育成するうえで有効であるということを明らかにすることができた。3 点目として，幼児の能力の見取りを支援する方策として，実際に活用しやすい遊びの見取りチャートを開発した。

本研究の意義をふまえながら，今後の課題と展望としては次のことが考えられる。1 点目として，幼児の生活において幼児の能力が発揮される場面は多様にあるので，保育実践の有効性を検証するためには，様々な課題の設定の仕方の工夫などの改善が必要である。2 点目として，本研究で導き出した 10 の能力と「3 つの資質・能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」との関連を検討することが今後の課題として考えられる。3 点目として，能力の捉え方に相違が見られる小学校教育とどのように連携・接続しながら子どもの能力の育成を行っていくのかということを明らかにすることが今後の展望としてあげられる。